冬は雪が降って、犬が野山をかけめぐる。
なんてうそっぱち
雪はちっとも白くない
まっくろ
野山をかけめぐったら
交通事故にめぐり会う
春夏秋冬はうそっぱち
時間について　いけなかった。

探鳥会に参加して

（去る五月二十日の記録）

上原千津子

二、三日来の雨はあがったが、空はまだ曇っていた。そのためか、桜川の土手の緑が一層しっとりとしてすがすがしい。

午前七時、ミナミボールの前に集合。子どもたちの声もにぎやかに、ざっと三〇人ばかり、「土浦の自然を守る会」の旗を先頭に桜川の右岸をくだってゆく。きょう指導してくださる川崎先生を、わが家の二年坊主は、「ぼくのような子どもにも、よくわかるように話してくれるやさしい先生。」という。去年の秋の探鳥会以来、母子ともすっかり先生のファンになった。鳥のシルエットや鳴き声などで、あれは何と、ずばりおっしゃる先生が、私にはたのもしくまたうらやましい。

まもなく一行はカイツブリを発見する。真黒くて小さい体ながら、かなりのスピードでスイスイと泳ぐ。飛び立つと足が赤いそうだ。この鳥は浮き草の上に巣を作り、飛び立つときには、ヒナの上に葉をかぶせて目立たないように用心をするという。昔からこれをニオノ浮き巣と呼んでいるのだそうである。

葦の間からしきりにかん高い鳴き声がする。オオヨシキリだ。よく歌にきくヨシキリの声がこれかと、いささかがっかりしたが、鳥自体は、かなりスタイルがよく、背が薄茶色がかっていて胸は白い。雀よりちょっと大きいくらいか。何羽もが葦のしげみを飛びかっては、時々枯れた葦のてっぺんにひょいと止まる。人の背をたやすく没する程のこの葦の林の中には、数えきれない程の巣やヒナがかくされているのだろう。葦の中に分け入ってそれをたしかめてみたい衝動にかられる。多分、その前に泥の中に埋まってしまうこともうけあいなのだが。